

## 開港初期ソウル地域民衆の近代的国民意識

### 形成過程と反日意識

趙 誠 倫

#### I .はじめに

本稿の目的は韓国近代国家形成期に民衆勢力が国家権力をどのように認識し、自分たちをひとつの国家の構成員、すなわち国民としてどのように自覚していったのかを説明することである。

朝鮮を中世国家として見ると、朝鮮社会の構成員は自らを王の臣民として、あるいは王の百姓(人民)として認識した。両班・士大夫らは朝鮮を王と自分自身を含む一つの国家としてとらえ、主人としての意識を持ってもらいたい。しかしながら、一般百姓らにはそのような可能性があまりなかった。朝鮮の百姓らは、大部分は農民、商人、手工業者であり、身分的には常民であり、奴婢だった。彼らから見れば、朝鮮はあくまで王の国家であり、両班の国家と考えていただけで、自分たちは主人ではなかった。

西洋で登場した近代国家の構成員を、一般に市民と概念化する。これら市民は国家が自らのものという主人としての意識を持つ。ところで、このような国民としての自覚と主人としての意識は、フランス革命の過程で見られるように、王宮を攻撃し、王を断頭台で裁き、貴族階級と対立し争いながら自分たちの力で共和政権を樹立し、ひいては外敵が攻撃してきた場合自ら軍隊を構成し、立ち向かって戦う中で形成されたものである。そのような意味で、市民とは特定の職業や身分によって定まるものではなく、中世権力と対立し争い、自分自身が国家の主人だという自覚をする中で、外国勢力に共同して対応する集団という特徴を持つ。

朝鮮社会は西洋とは非常に異なる歴史的過程をたどったので、市民という概念をそのまま用いることができない。その代わりに筆者は、王朝国家から近代国家への転換過程で、支配層の権威に縛られて素直に従うばかりではなく、人間としての権利を得るために積極的に闘争した人々を「民衆」と見ることとする<sup>1</sup>。中世国家の臣民と百姓の中から民衆勢力が形成され、彼らが新しい社会へ移行する中心軸を形成したと考える。

朝鮮という中世王朝国家が近代国民国家へと転換される過程は、決して平坦ではなかった。言うなれば、中世国家内部から改革の要求が湧き上がってきたのだが、朝鮮は内部改革によって近代国家

<sup>1</sup> 民衆の概念は次を参考にしたものである。鄭昌烈(1981)「百姓意識、平民意識、民衆意識」『現状と認識』第5巻第4号、106頁(정창렬(1981)「백성의식, 평민의식, 민중의식」『현상과 인식』제5권 제4호, 106쪽)

に転換できない状態から、外部の圧力により強制的に開港された。当時の朝鮮の民衆は、一度にどつと押し寄せてくる外国勢力への恐れを感じていたと同時に、外国勢力に限りなく無力な朝鮮政府への失望も感じていた。そのような点で、1876年の開港は朝鮮の臣民、百姓にとって大きな脅威だったが、同時に短時間で、中世王朝国家の臣民と百姓の地位から脱却し、新しい国家の国民として自らを意識できる機会でもあった。なぜならば、対外的な危機が起こり、これが深刻に受け止められるようになると、人々が普段あまり考えていなかった同類意識が強まる。従って、国家が危機を迎えていたときこそ、かえってこの危機が構成員をまとめ、国民的自覚を促進する可能性が高いと考えるからである。

このような点を念頭に、本稿では開港という時代的な状況から積極的に国家の政策を批判し、自らの意思を表出した民衆勢力を中心に近代的国民意識の形成過程を検討していく。筆者は、当時最初に直接的に刺激を受け、新しい国民意識を自覚したのがまさにソウル地域の民衆だったと考える。なぜならば、ソウル地域こそ外国外交使節と外国の軍隊が最初にやって来た場であり、外国商人が手始めに進出し、商圈を占有しようと競争を繰り広げたところだからである。そしてソウルは王室と各権力機構が置かれた場所というだけではなく、南方、北方の物産が集散する流通の中心地として、ソウル地域の民衆は国家権力をめぐる中心部の様々なできごとを直接見聞き、経験しながら暮らしていた。従って、韓国社会内でもソウル地域に居住する住民こそ最初に新しい政治意識を持つ可能性が高い集団だったと考える。従って、本稿ではまずソウル地域の民衆の国民意識の自覚という問題を外国勢力との関連の中で、特に日本についての民衆の認識を通じて整理する。

本稿で取り扱う時期は、1876年の開港直後から壬午軍乱を経て、甲申政変が起こった1884年までである。筆者は、韓国で開港初期と呼ぶこの時期に起こった主な事件である壬午軍乱と甲申政変を通じて表われた民衆の行動と言動などから、彼らの執権勢力への批判と外国勢力、特に日本への意識を検討していく。

## Ⅱ.開港直後政府の政策転換と民衆の反日意識

朝鮮社会は長い間中華体制の中に安住していた。従って、西洋列強との交流は、執権者らの念頭になかった。そのうちにキリスト教(カトリック)はもちろん、異様船(異国船)の出没に、伝統的な性理学論理に深く陥っていた朝鮮社会の知識人のほとんどが、大変な恐れを感じた。これは一般民衆も同様だった。彼らの目に、軍艦は直ちに軍事的侵略を連想させるものだった。

大院君の鎖国政策は、こうした両班儒者らと民衆の恐れを代弁し、庇う政策だった。もちろん鎖国政策は世界情勢をよく知らなかったため可能だったのであり、決して長期的に可能な政策でもなかったが、少なくとも当時は多くの両班儒者と民衆から絶大な賛同を得た。しかしながら、一方では斥倭碑に象徴される大院君の鎖国政策によって一旦は阻止されたが、西欧列強への恐れと敵対感依然として民衆の間に広がっていた<sup>2</sup>。当時民衆にとって西洋人は非常に見慣れない異質な存在で、さらに強い武

<sup>2</sup> 尹晋憲(1996)「大院君の鎖国政策に関する研究」『東亜論叢』33集、東亜大学校(윤진헌(1996)「대원군의 쇄국정책에 관한 연구」『東亜論叢』33집, 東亞大學校)

力を持っているという事実は、彼らを恐ろしいものとして印象付けていた。その例として、1860年に英仏連合軍が北京を侵犯したという情報を聞いたときに、朝鮮の両班知識人らが受けた衝撃と混乱がどれほど大きかったか考えてみればわかるであろう<sup>3</sup>。

こうした恐れと危機感が広がっている状況で、朝鮮に開港を強要したのは西洋国家ではなく日本だった。1875年8月25日に起こった「雲揚号事件」は、日本が朝鮮を門戸開放するために意図的に引き起こしたものだ。この事件によって、朝鮮民衆は日本という存在を具体的に認識させられることになった。日本の軍艦の攻撃を受けた途端に、武力示威に驚いた朝鮮政府は急いで日本と不平等条約を締結した。大院君が失脚してからいくらか経たないうちに起こったこの事態は、両班儒者らはもちろん、民衆にとっても衝撃だった。外国勢力の侵入が現実になり、それも西欧列強ではなく、日本が当事者だというのは、簡単に受け入れられないことだった。

開港以降、日本は彼らが欧米各国との開国交渉過程で学んだ通り、朝鮮との修好条約を結んだので、当然お互いに自国の公使を相手の首都へ駐留させるべきだと考えた。そのため、日本側は日本公使のソウル常駐を強く要求した。朝鮮時代以来ソウルに外国人が常駐したことはなかった。中国の使節からも往来しただけであり、常駐はしなかった。そのため、朝鮮政府は、はじめは拒絶しながらも、結局は承認してしまった。1880年11月に西大門外の清水館に公使館が設置され、公使のソウル常駐が黙認された。このとき、公使館には日本国旗が掲揚され、ここでは公使以外に書記官、随行員、巡查、通訳官など40人あまりが常駐した。この40人あまりの日本人がソウルに常駐し、ソウルの街を闊歩して通ると、彼らが行き来するとソウルの城壁の内側が騒がしくなると言っ、日本公使の外出に石を投げる住民までおり、物議を醸していた<sup>4</sup>。

開港以降、ソウルに日本公使館が設置され、日本人たちが勝手に首都を往来する姿は、民衆の反日感情を広げる重要な要因になった。まだ漠然とした状態ではあったが、伝統的な倭を軽んじる感情と、倭寇の侵略と壬辰倭乱を経験し被害を受けた感情的な傷、雲揚号事件で持つに至った日本の軍事力への恐れ、そして日本からの商品浸透と米穀輸出に起因する物価高騰など、いろいろな原因が複合的に作用しながら一般大衆の間に反日感情が猛スピードで拡大していった<sup>5</sup>。

このような民衆の反日感情を背景に具体的に現れたのが、衛正斥邪派儒者らの反日上疏の動きで

---

林在讚(2001)「丙寅洋擾直後の大院君の軍事政策」『慶北史学』24集、慶北史学会(임재찬(2001)「병인양요를 전후한 대원군의 군사정책」『경북사학』24집, 경북사학회)

<sup>3</sup> 裴亢燮(1994)「開港期(1876~1894)民衆の日本への認識と対応」『歴史批評』27号、秋号、歴史批評社(배항섭(1994)「개항기(1876~1894) 민중들의 일본에 대한 인식과 대응」『역사비평』27호, 겨울호, 역사비평사)

<sup>4</sup> 孫禎睦(1982)『韓国開港期 都市变化過程研究』一志社、169-176頁

<sup>5</sup> 姜徳相(1962)「李氏朝鮮開港直後における朝日貿易の展開」『歴史学研究』265号、歴史学研究会  
梶村秀樹(1983)「李朝末期綿業の流通、及び生産構造」『韓国近代經濟史研究』四季節(梶村秀樹(1983)「李朝末期 綿業의 流通 및 生産構造」『韓國近代經濟史研究』사계절)

吉野誠(1975)「朝鮮開国後の穀物輸出について」『朝鮮史研究会論文集』第12集、朝鮮史研究会

金敬泰(1972)「対日不平等条約改正問題發生の—前提—開港前期の米穀問題から見た外圧の実態」『梨大史苑』第10輯、梨花女子大学校史学会(金敬泰(1972)「對日不平等條約改正問題發生의 —前提— 開港前期의 米穀問題에서 본 外壓의 實態」『梨大史苑』第10輯, 이화여자대학교사학회)

金敬泰(1994)「開港と不平等条約關係の構造」『韓国近代經濟史研究』創作と批評社(金敬泰(1994)「개항과 불평등조약 관계의 구조」『한국근대경제사연구』, 창작과비평사)

ある。代表的な衛正斥邪論者に数えられる崔益鉉は、倭洋一体論を主張しながら、開港に反対する上疏を行い、これを始めとして儒者らの上疏が続けられた。開港は朝鮮社会が政治・経済的に半植民地に転落する契機となり、日本との条約は引き続き西洋諸国との条約を招くものだという点と、外国への門戸開放政策を中止し、民生安定のための内政改革を優先すべきという点が上疏の共通の内容だった。儒者勢力の不満を爆発させた絶好の機会となったのは、黄遵憲の『私擬朝鮮策略』という冊子だった。『策略』を標的に起こった反対運動は、1881年3月「嶺南萬人疏」が発端となって、全国へ広がったが、初めは主に開化派が攻撃対象とされ、激化につれて次第に閔氏戚族政権も攻撃対象に加えられた。政府は儒者勢力の反対上疏運動を全面的に弾圧策で統制したが、弾圧策は特に効果を上げられないまま、かえって全国の儒者を刺激した。主な上疏者が処刑や流罪にされたが、上疏者は続出し、攻撃の矢は結局国王高宗と日本人にまで向かうこととなった。一方で、開港直後の政治・社会の雰囲気の中で、特に両班儒者層の間には、上疏よりも直接的な武力を用いる伐倭方式が必要との認識が広く一般化していき、儒者勢力の指導者らがこのような一般的な認識の下で具体的な実践計画を立てたと推測できる<sup>6</sup>。

儒者の活動は対内的に社会改革の点では民衆と目指すところが違ったものの、反外国勢力、特に反日の面で民衆の要求を代弁する行動を取っていたので、民衆は儒者の動きを積極的に支持し、彼らの考えに賛成することで自分たちの態度を表していた。特に萬人疏運動が展開されていた当時、儒者らは民衆から非常に支持されていた。宋相燾の『騎驢隨筆』を見ると、疏頭(上疏の指導者一訳注)らが監獄に入れられたとき、刑曹の胥吏、羅将(刑曹所属の下級官吏一訳注)らは嶺南の儒者たちと洪在學といった上疏儒者を丁重に扱い、洪在學が処刑場へ連れて行かれるとすぐに通りを埋めたソウル市民がその車について行きながら号泣したとある<sup>7</sup>。ここから、保守的な両班儒者と、ソウルで下層生活をしてきた一般の市民が、身分的に大きな差がある集団とはいえ、互いに強い連帯感を感じていたのを読み取れる。このような連帯感は、朝鮮の歴史の中でほとんど見られないものだろう。おそらく壬辰倭乱のときに、倭軍に対して義兵を起し、協力した経験以外には簡単には見出せないものではないかと考えられる。

しかし、政府は衛正斥邪の上疏と儒者の集団的な抗議デモに萎縮せず、富国強兵策を推進していた。この時期の開化思想は韓国の伝統倫理と道徳を維持しながら、西洋の科学技術を受け入れ、富国強兵を成し遂げようとする東道西器論の立場だった。金玉均や朴泳孝もこの時期には東道西器論的観点から逸脱していなかったと見られる。あるいは、この時期になって、百姓を教化する意味の「開化」という用語が、西欧化、文明化の意味で使われ始め、次第に一般化していった。いわゆる開化論者の開化への自覚が芽生え始めた<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 趙誠倫(1985)「開港直後、大院君派のクーデター企図—李載先事件を中心に」、楊尚弦編『韓国近代政治史研究』図書出版四季節(조성윤(1985)「개항 직후 대원군파의 쿠데타 시도—이재선 사건을 중심으로」楊尚弦 編『韓國近代政治史研究』도서출판 사계절)

<sup>7</sup> 宋相燾『騎驢隨筆』国史編纂委員会、1971年、8-14頁、江原道疏首洪在鶴／辛巳(高宗十八年)閏七月七日。

<sup>8</sup> 朱鎮五(2004)「19世紀後半文明開化論の形成と展開」『西欧文化の受容と近代改革』(延世大学校国学研究院編)太学社(주진오(2004)「19세기 후반 文明開化論의 형성과 전개」『서구문화의 수용과 근대개혁』(연세대학교 국학연구원 편), 태학사)

閔氏戚族政権は開化政策の一環として軍制改革を推進し、旧式軍隊を淘汰し、日本式軍事制度を導入する方向へ進んだ。1881年に従来の訓練都監をはじめとする各軍營を武衛營と壯禦營の2軍營に縮小改編し、新式軍隊の教練兵隊(日本名は別技軍)を創設することで、士官候補生の養成も推進した。統理機務衙門の軍務司である閔謙鎬は、花房義質日本公使の書信の内容を伝達し、堀本礼造日本陸軍少尉を訓練教師として軍隊を訓練させることを要請した<sup>9</sup>。5月に政府は兵士の選抜と訓練に関する条項をつくり、軍務司教練局の下、教練兵隊に新式軍事訓練を実施した。教練兵隊の兵士は、京五營の志願者から80人を選抜し、それ以降人員を補充し続け、士官生約140人と兵卒約300人に訓練させた<sup>10</sup>。堀本の指揮下、現代式小銃と洋槍で武装させ、新式訓練を実施した。旧式軍營の兵士が失職させられ、給料も普通に支給されていないのは異なり、教練兵隊は、給料支給はもちろん、衣服などいろいろな面で良い待遇を受けた。このために下級兵士らは近代化過程で疎外され、追い出される者になってしまい、将来について失職と淘汰の危機感を強く感じていた。ここに、他の都市下層民らと同じく消費者層として、そして商業・手工業従事者として被害を受けていた面が同時に複合的に作用していたため、結局下級兵士らは両方の面から最も深刻な被害を受けている集団となっていたのである。

非西洋人の日本人たちがやって来て、首都に居座り、軍事訓練をさせたのは、いろいろな噂を生み、彼らの一挙手一投足が関心の的となった。そのため慕華館で訓練を受けた別技軍が市民からひどく馬鹿にされたり、悪口を言われたりしたために我慢できず、教練場の北門外の平昌へ、さらには下都監へ移り続けなければならなかったとある。それだけではなく、行商人数千人が教練所長を攻撃して全員殺すという噂まで広まっていた<sup>11</sup>。ここから、民衆の間に、現政権担当勢力と彼らが引き入れた日本勢力への敵対的な態度が、かなり広範囲に広がっていたのを確認できる。

### Ⅲ. 壬午軍乱を通して見た民衆意識の成長と反日意識

1882年ソウルで訓練都監の下級兵士が中心になって発生した壬午軍乱は、開港直後から立て続けに発生してきた反日上疏運動と、1881年末遂に終わった大院君派のクーデター計画で構想していた「伐倭」を最も劇的に実践した民衆運動だった。特に、民衆の力で閔氏戚族政権が倒れ、大院君第二次政権が成立したという事実は、韓末の社会変動過程で非常に重要な意味を持つ。民衆を基盤に大院君政権が成立することで、民衆の社会変革の要求が正当性を獲得し、政治的なレベルで実現される機会を得たのである。大院君第二次政権は、6月10日から大院君が清軍に拉致される7月13日までの33日間続いた。大院君政権が続いたのは、兵士の実質的な力の掌握と都市下層民の全幅的な支

<sup>9</sup> 延甲洙(1993)「開港期権力集団の情勢認識と政策」『1894年農民戦争研究3』歴史批評社(연갑수(1993)「개항기 권력집단의 정세인식과 정책」『1894년 농민전쟁연구 3』역사비평사)

<sup>10</sup> 崔炳鈺(2000)『開化期の軍事政策研究』景仁文化社(崔炳鈺(2000)『開化期の 軍事政策 研究』景仁文化社)

<sup>11</sup> 『備邊司謄録』高宗17年11月13日;金正明編『日韓外交資料集成』7巻、138-139頁

持基盤があったためだった<sup>12</sup>。

一方壬午軍乱は、開港以降民衆の反日意識が最も強く、直接的な形で表出した代表的な事件だった。それはソウルに常駐した日本人たちが殺害され、日本公使館が燃上する形で表れた。下級兵士らが普段どのような不満を持っていたのかは、彼らが事態の拡大のなかで動いた方向を見るとよくわかる。彼らはまず訓練兵隊、すなわち別技軍を攻撃した。兵士らは別技軍が新式訓練を受けていた教練場所の下都監に押しかけ、領官の鄭龍燮を殺し、洋槍を全て壊して、下都監を宿所として生活していた日本人教練官の堀本陸軍少尉を追いかけて殺した。また、彼らは南大門近くの路上で陸軍語学生、私費留学生など3人と、彼らの救助に駆けつけた日本公使館外務巡查3人も全員路上で民衆に殺された。

そして続いて日本公使館清水館を襲撃した。西大門近くの住民は、兵士が日本公使館攻撃を始めると、押しかけて加勢や見物をした。おそらく加勢した人々より見物人がはるかに多かっただろう。日本公使館員らは銃を持っており、ときどき威嚇射撃をしていたので、公使館に簡単には接近できなかった。そこで後から考え付いたのが放火だった。公使館の隣の家に火を付け、この火を公使館に燃え移らせるようにしたところ、この作戦が成功し、公使館は炎に包まれた。やむなく外へ出た公使館員一行は仁川へ逃げると、兵士は一行を引き続き追いかけて、仁川でも攻撃した。激しい戦闘の末、日本人は6人が死に、5人が負傷したまま逃げたが、ついに停泊中の英国船舶に救助され、日本へ帰った。これだけ見ると、壬午軍乱で最も際立つのは日本への敵愾心ではないかとも考えられる。

ソウル地域の民衆にとって、日本人は最も重要な憎悪の対象ではなかった。より重要なのは国の政策担当者であり、王室だった。閔氏戚族政権は腐敗した政権だった。彼らがどんな政策をとったのかによって民衆の生活が変わってくるため、無能な王室と政府への批判意識が最も強烈だった。

兵士のデモが本格化した6月9日、デモ隊が捕盗庁と義禁府の獄門を破壊し、罪人を解放した。そして、江華留守の閔台鎬をはじめとする閔氏戚族政権の重要人物と開化派官僚の家を順に襲撃して破壊する一方で、ソウル近郊にある重要な寺刹を壊し、火をつける行動を夜遅くまで続けた。10日には興仁君・李最應の家を襲撃、殺害し、路上で閔昌植を殺害した後、すぐに昌徳宮敦義門へ押しかけた。宮殿の中へ流れ込むように入って来た反乱軍民は、閔謙鎬、李憲ら大臣と、李敏禮をはじめとする多くの内侍たちを殺した。金輔鉉は宮殿に駆けつけてきたところで殺された。閔妃は宮殿の外へ避難して隠れた。このような過程を経て大院君政権が樹立された。政権交代以降は、彼らは自らソウルの治安を担当しながら、新しくできた政権を守ったが、このような状態は大院君が清軍に拉致されるまで約一か月間続いた。その間、兵士はソウルの治安を掌握したまま、閔氏に関わる者と開化派の搜索作業を行った。「兵士が貞洞へ行き、すでに殺害された閔氏戚族大臣の閔致庠の家を壊し、倭別技に所属する者、または全国的に有名な巫女や巫覡の家などを壊さなかったところはなく」、中人富豪の家約70棟を壊すなどの行動を続けていた。

このような兵士を中心とした民衆の攻撃行動を整理してみると、①閔氏戚族関連人物、②有名な巫女、ソウル近郊の重要な寺、③開化派、日本と親しい者、倭別技に所属する者、④中人富豪の家約70

<sup>12</sup> 趙誠倫(1999)「壬午軍乱」『韓国史』38、国史編纂委員会

棟、となるだろう。

民衆の攻撃行動からわかるのは、一次的な攻撃対象は失政を重ねていた閔氏戚族政権の官僚であり、次の攻撃対象は彼らと手を取り日本勢力を引き入れていた開化派であり、そして、日本人自体が攻撃対象となっていた。

もちろんここに閔妃と関連があった巫女と寺、そして富を蓄積していた中人富豪も含まれていた。実際に閔氏戚族勢力と開化派、そして中人富豪は、お互いが密接につながって、政治的・経済的支配層として君臨しながら、日本勢力を引き入れていった。そして、寺と巫覡は宮中腐敗の代表的な象徴だった。

彼らは腐敗した閔氏戚族政権に対し、強い不満と敵愾心を持っていた。彼らは民のための公正な政治をせず、個人の私利私欲に心を奪われた。売官売職が横行しており、少数権力者の家では金銀財宝があふれ出る状態だった。民衆の目には、長い間安東金氏政権が権力を独占し、百姓を苦しめているうちに、短期間に大院君が政権について収奪が抑制されたようだったが、高宗親政体制となるや、今度は閔氏の一族がそれぞれ重要な官職を独占し、財産を増やすのに余念がないように見えた。しかも、高宗を思うがままにする閔妃が世継ぎのために祈れと巫女に命じて祭祀を行い、いろいろな寺にお布施をし、金剛山一万二千の峰に絹を下賜して祈り、巫女真靈君を堅く信じて頼り、閔羽を祭る祠堂である北廟を建てるといったことの全てが、非難される行為だった<sup>13</sup>。そんな閔妃が攻撃対象になったのは当然の結果だった。民衆にとっては、もはや王后への尊敬心はなかった。もちろん王宮を襲撃して閔妃を殺害しようという行動を大院君が指示したとも言えるが、それは重要な問題ではなかった。重要なことは、すでに民衆が閔妃を殺せる意識を持っていたという点である。

閔氏戚族勢力と共に大きな被害を受けた別の集団は開化派だった。「日本人と親しい者と開化を志したと知られた者を逮捕し、監獄に収容し、殺すことが頻繁に起こっていた」<sup>14</sup>。開化派、日本と親しい者、倭別技に所属した者全てが攻撃対象で、特に日本を引き入れる政策を立て、執行した人々が優先だった。

運動で表現された都市下層民の要求は、開化政策を推進しながら日本勢力を引き入れる政治的・経済的支配層と、日本をはじめとする外国勢力を攻撃、除去することで、自らに迫り来る脅威を除去し、社会制度を改革しようとするものだった。この実現のために、彼らは新しい政権担当者として大院君を選択したのである。しかし、都市下層民の要求がこのように封建的社会体制を攻撃し、崩壊させようという面を強く持っていたながらも、この体制を理念のレベルまで根本的に否定し、克服しようとする変革運動には変えられなかったと見られる。

#### IV. 甲申政変とその後の変化

壬午軍乱が外国勢力の介入で鎮圧されたとき、民衆の失望は非常に大きかっただろう。特に彼らは

<sup>13</sup> 黄玿『梅泉野録卷之一』上 甲午以前

<sup>14</sup> 金正明編『日韓外交資料集成』巻7「梅津中尉聴取朴永圭情報」

自らの要求を通そうしていた努力が、外国勢力によって挫折する過程で重要な経験をしたわけだった。その後、日本公使館が場所を移して再建され、今度は日本の軍隊が城壁の中にまで駐屯する状況が起こった。もちろん、壬午軍乱を鎮圧した清軍2000人も依然下都監に陣取っている状況だった。一方で日本の商人和清の商人が互いに競うようにソウルの街に進出していた。朝鮮の民衆にとって、清と日本の商人が入って来て、清軍と日本軍が同時にソウルに駐屯する状況は、はじめて迎える事態だった。民衆は不安感を抱き、事態を見守っていた。その上、民衆が望む社会改革はかなわないまま、以前より一層活発に開化派が登用されていた。さらには金玉均が鬱陵島を日本に売り払ったという噂が広まってもいた<sup>15</sup>。このために民衆は日本勢力を引き入れる開化勢力への敵対感を次第に強く抱くようになったのであろう。

こうしたことは、甲申政変当時の政変へのソウルの民衆の態度からうかがい知ることができる<sup>16</sup>。当時民衆は主に噂を通じて甲申政変が発生したという情報を聞いていた。そして、民衆は甲申政変を「乱党」、すなわち開化党と日本人が引き起こしたものと理解していた。そして、政変翌日の10月18日午前から多くの人々が路上に出てうろついていたという。このときの市内中心街の状況を、尹致昊は「道路は人々で埋め尽くされ、ごったがえしており、人々の肩が互いにぶつかり、駕籠と馬が通りづらい状況だった」<sup>17</sup>と書き記した。19日には政変をめぐるデマが流れていたが、日本軍が増員されてきたことと、王室が廃されたという噂があり、王妃はすでに死に、王の安否がわからないという、非常に危うく衝撃的な噂だった。この日も尹致昊は「当時人民がうるさく騒ぎ立てながら、道を埋めていたので、一つ一つを記録できない」としている<sup>18</sup>。尹致昊が経験したように、ソウルの民衆は甲申政変の事態推移を知りたがっており、全ての通りがあふれかえりあちらこちら歩き回っていた。

当時の状況を次の二つの資料から見てみよう。

A. 私は「金玉均の乱」が起こって以来いろいろと奔走していたが、王が桂洞宮から宮殿へ帰ってきて以降は、朴泳孝とはほぼ同じ考えを持つようになり、計画が成功するというはじめ持っていた希望をあきらめた。清国軍隊が王宮に侵入したまさにそのとき、私は苧洞の家にいた。私は清国軍が王宮に侵入したという情報を聞くとすぐさま今泉秀太郎と福島春秀とともに状況を確認しようとあらゆる方法を用いたが、城内の騒擾状況を正確につかめなかった。すでに数多くの日本人が暴徒たちによって殺害されたという噂もあった。すぐに我々3人は各々刀を持って家を出て、日本公使館へ向かった。途中数回清国人と朝鮮人に出会い、戦ったが、結局福島は負傷し、今泉も腹に石が当たった。我々3人がかろうじて公使館に着いたのは午後6時になってからだった。

(井上角五郎(1891)『漢城之残夢』東京春陽書樓。韓国語翻訳は、이노우에 가쿠고로, 「한성지잔몽」, 한상일 역, 『서울에 남겨둔 꿈』, 건국대학교출판부, 1993, 53쪽)

<sup>15</sup> 黄玠『梅泉野録卷之一』上 甲午以前

<sup>16</sup> これに関しては朴銀淑の研究が唯一のものである。朴銀淑(2005)「民衆の甲申政変認識と敵対的対応」『甲申政変研究』歴史批評社(박은숙(2005)「민중의 갑신정변 인식과 적대적 대응」『갑신정변연구』역사비평사)

<sup>17</sup> 「時道路充塞、人肩相接、輜馬難通、歸館之路」、尹致昊『尹致昊日記』1884年10月18日(陽曆12月5日)

<sup>18</sup> 「當是時、人民喧擾道路、不可記録」、尹致昊『尹致昊日記』1884年10月19日(陽曆12月6日)



B. 兵士は清軍と日本軍が交戦するとき清軍に従って戦い、日本軍が撤収すると鬱憤を抑えられず、高宗の周囲にいた開化派の人物洪英植と朴泳教を引きずり出し、殺しながら一同に万歳を叫んだ。……開化派を全て鎮圧した後すぐに都城の民は歓呼の声を上げて喜んだ。都城の民は開化党の政変に憤り、見つければ捕まえて殺し、群れをなして押し寄せ日本公使館に火を付け日本人官吏を殺した。

(黄珪『梅泉野録卷之一』上 甲午以前)

こうした記録は何を伝えているだろうか。政変を起こした開化派勢力は日本軍に護衛されていた。清軍が王宮に突入し交戦した後に、日本軍は敗れ、開化派勢力の一部は日本軍とともに逃亡し、一部は清軍に殺された。このとき注目したいのは朝鮮軍である。壬午軍乱に参加していた経験がある朝鮮軍が清軍とともに日本軍を攻撃し、開化派勢力を捜索して殺害する際に、もう一度登場するのである。そして市内のあちこちでは日本人を対象にした一般民衆の攻撃が起こっていた。井上の資料からこの点を読み取れる。民衆は槍や石を持って、日本人を突き、投石し、日本人たちは刀を振り回しながら戦った。結局莫大な被害を受けた日本人たちは公使館へ集結したが、公使館が放火されたため、仁川へ逃げるしかなかった。2年前の壬午軍乱のときと同じ状況が再び繰り返されたのである。

このような民衆の態度から、もちろん甲申政変が開化派の改革運動にとって非常に重要なものだったとはいえ、開化派の路線は民衆が要求していた改革路線とは違ったものだったのを読み取れる。開化派ははじめから民衆に不信感を持っており、民衆との協力など考えてもいなかった。一方で、民衆は開化派が国を日本に売り払っていると考えていたのだが、彼らが日本軍と協力して、王宮を占領するとすぐ自分たちの判断が間違っていなかったと確信するに至っただろう。民衆の態度はこの点を如実に表している。

壬午軍乱と甲申政変を経て、政府は日本と清にさらに多くの通商権を付与することになった。特に最大の市場のソウルが外国商人の浸透に開放されると、零細小商人たちはもちろん、大規模特権商人たちの商業活動まで大きく脅かされることになった。日本と清の商人は、自国公使館と軍隊の庇護のもとで、四大門内と龍山地域に商店を出したり、露店活動によって商圈を広げていった。1880年代後半にはその勢力が広がり、松島・水原・天安といった重要都市にも数十人ずつ進出し、全国各地を往来しながら商行為をしていた。清商人は全国各地の場市に深く入り込んでいたため、行商人と頻繁に衝突を起こすなどした。

この時期の日本商人と清商人の進出への朝鮮人の抵抗を検討した韓祐勲は、「朝鮮人の清国人への反発の多くは彼らが貿易する物貨の劫掠と放火として現れているのは対照的に、日本商人または日本人には、投石、殴打、殺傷など人身への直接的な攻撃として現れている点である。また、清人との事件の端緒が、主に中部以北の地方で見られるのに対し、日本商人との事件の端緒はほぼ国内全域だったという点である。このような動向は正確なものとはいえないが、おおよそ日本人の浸透勢力がより広範囲に渡っていたことを物語ると同時に、彼らへの反発がより激烈だったことを表出することも考

えられるようだ」と指摘した<sup>19</sup>。

1889年ソウルでは日本をはじめとする外国商人を排斥する闘争が起こった。ソウル商人は外国商人をソウルから撤収させることを政府に要求した。これに対し、政府は清・日本などとの交渉に着手したが、交渉過程で日本がソウル撤収の代価として龍山を租界地にする要求をしてくると、商人たちはこれに反対し、商店を閉め、一斉休業闘争を断行した。1891年5月にはソウルの魚商人が日本商人の魚商業行為の禁止を要求し、闘争を始めた。二つの場合のいずれも政府が外国勢力に屈從的な態度を取っていたため、要求条件を通すのには失敗したが、外国勢力の侵略に反対する商人の集团的闘争を展開する積極的な対応が見られる<sup>20</sup>。

一方、米国とフランスは商業活動と同時に、プロテスタントとカトリックを浸透させようとしていた。これに対し、朝鮮政府はなんの強制力も行使できず、牧師や神父がソウルはもちろん全国各地に自由に活動範囲を広げていった。大部分の民衆は彼らを恐れ、遠ざけていた。ソウルで幼い子どもたちが失踪する事件が相次いで起こると、民衆の間では米国人宣教師たちが幼い子どもたちを捕まえて食べるという噂が広がったことがあり、1889年慶尚道咸安ではカトリック教徒が死体の首を切り、血を吸うという噂が広まったが、このような噂から民衆の認識をある程度推測できよう<sup>21</sup>。全国各地を巡るフランス人たちに、民衆はあちこちで悪口を浴びせたり、石を投げつけたりするケースが多く、時には彼らを襲撃し、財物を奪い、負傷させたり、殺すまでした。しかし、一部では朝鮮政府が彼らにむやみに手を出せないことを利用し、彼らに依存することで利益を得ようとする部類が現れ、信者数は増加した。このためカトリック教徒になった韓国人たちが、フランス人を頼みに田畑を奪ったり、人々をむやみに殴打するなどの事件が起こり、韓国人カトリック教徒と住民の衝突が増加した。

開港直後には、日本を含む外国勢力の圧力が主に都市を中心に集中的に加えられたが、その影響は次第に農村に拡大していき、それにつれて農民闘争も次第に活発化した。壬午軍乱以降、1894年まで全国で発生した暴動は全部で38件に上るが、特に1890年代に入って集中的に起こった。鉦山での暴動も何度も発生した。暴動は全国的に拡大していき、ほとんどの暴動では租税収取構造の乱れの解決、官吏の不正腐敗摘発を掲げ、開港以前と変わった点はあまり見られない。しかし、一部では政権奪取を目指す武装蜂起的な暴動も発生していた<sup>22</sup>。民衆の抵抗の中で、外国人たちに直接攻撃する場合はもちろんだが、国内官吏への租税抵抗と表現される各種の暴動、すなわち直接的には外国勢力への抵抗を表には出さず、国家権力への抵抗としてだけ表現される場合であっても、それはほとんどが外国勢力の浸透と密接に関連して大韓帝国末期に深まった国家の収奪への抵抗だという点を見落としてはならない。

<sup>19</sup> 韓祐勳(1970)『韓国開港期の商業研究』一潮閣、119頁(韓祐勳(1970)『韓國開港期の 商業研究』一潮閣、119頁)

<sup>20</sup> 金正起(1989)「1890年ソウル商人の一斉休業同盟ストライキとデモ闘争」『韓國史研究』67集、韓国史研究会(김정기(1989)「1890년 서울상인의 철시동맹파업과 시위 투쟁」『韓國史研究』67집, 한국사연구회)

<sup>21</sup> 韓祐勳前掲書、同箇所

<sup>22</sup> 朴廣成(1979)「高宗朝の民乱研究」『論文集』14号、仁川教育大学校(朴廣成(1979)「高宗朝의 民亂研究」『논문집』14호, 인천교육대학교)  
韓祐勳(1971)『東学乱起因に関する研究』ソウル大学校韓国文化研究所(韓祐勳(1971)『東學亂 起因에 관한 연구』서울대학교 한국문화연구소)

開港初期の民衆の国家権力と外国勢力への認識の程度と対応を整理すると、開港初期の民衆は外国勢力の浸透に対し、たとえ漠然とした感情であっても、恐れと敵対感を同時に持っており、その時々で両者がしばしば食い違っていた。しかし、壬午軍乱と甲申政変を経て、そして全国各地を巡って商行為と布教活動を始める外国人を直接自分の目で見て接触するようになると、民衆は比較的明確に彼らの実体を認識し始め、彼らへの多様な対応を示した。

民衆は、日本人・清国人を含む外国人に、強い敵対感を抱いただけではなく、外国勢力浸透を許容し、彼らを積極的に引き入れる閔氏戚族勢力と開化派勢力、そして外国商品の浸透と穀物輸出の過程で莫大な中間利得を取る特権商人に強い敵対感を見せていた。特に開化党を「倭党」、開化派官僚大臣を「倭官僚」、「倭大臣」と呼んで敵対視した。民衆は、閔氏戚族政権と開化派の改革路線が、基本的に自らの社会改革の要求とは対立するばかりで、外国勢力の浸透を無制限に許容するものとしてとらえたのである<sup>23</sup>。

民衆はこのように、外国勢力の浸透と彼らを引き入れる勢力に強い敵対感を見せ、また行動で表していたが、まだ帝国主義の浸透論理と浸透結果が民衆自身の生活にどんな影響を与えるかについて、明確な認識を持てなかった。このために彼らの政治的期待は、依然として排外政策路線を歩んだ大院君に傾いていた。もちろん大院君は民衆の要求をきちんと反映できるようなレベルではなく、このような幻想は数回の変乱を経て、徐々に崩れていった<sup>24</sup>。この時期、外国勢力の浸透への抵抗の論理と、近代民族国家形成の論理は、決してスムーズには引き継がれなかったが、民衆は具体的な闘争過程において、二つの論理を結ぶ方向で近代民族国家樹立による民族問題の解決を目指す方向へ動いていった。

## V. 同胞概念の広がり と 反日意識

最近、壬辰倭乱に関連するシンポジウム<sup>25</sup>で、ジョン・ダンカン(John Duncanson)は、『壬辰録』など朝鮮後期に民間で広く読まれていた本から、民間伝承に表れた民衆の民族意識を分析した興味深い論文を発表した<sup>26</sup>。ダンカンはこの論文で、西洋帝国主義と民族主義が押し寄せた19世紀末、20世紀初めの韓国人の集団的「民族」意識形成過程に、壬辰倭乱についての記憶がどう作用していたかを調査した。彼は「壬辰倭乱についての民間の記憶は、単に「忘れられない異邦人」である日本人と中国人への敵対感を表しただけではなく、エリック・ホブズボーム(E. Hobsbawm)が指摘した「排他的一体感」、すなわち朝鮮の

<sup>23</sup> 朴銀淑(2005)「第5部 民衆の認識と甲申政変に対する立場」『甲申政変研究』歴史批評社(박은숙(2005)「제5부 민중의 인식과 갑신정변에 대한 입장」『갑신정변연구』역사비평사)

<sup>24</sup> 趙誠倫(1985)「開港直後の大院君派のクーデター指導」、楊尚弦編『韓国近代政治史研究』四季節(조성윤(1985)「개항 직후 대원군파의 쿠데타 시도」, 양상현 편『韓國近代政治史研究』사계절)

<sup>25</sup> 2006年6月慶尚南道・統営で開かれた「壬辰倭乱:朝日戦争から東アジア三国戦争へ」という学術会議は次の本に整理されている。鄭杜熙、イ・ギョンスン編(2007)『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』ヒューマニスト(정두희·이경순 엮음(2007)『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』휴머니스트)

<sup>26</sup> ジョン・ダンカン(2007)「壬辰倭乱の記憶と民族意識の形成」、鄭杜熙、イ・ギョンスン編前掲書(존 던컨(2007)「임진왜란의 기억과 민족의식의 형성」, 정두희·이경순 엮음『위 책』)

人々は隣の国の人々とは区別される政治的・社会的共同体を形成しているという自覚を呼び起こすのにも寄与したと見られる」<sup>27</sup>と述べたが、ここでホブズボームが言う「排他的一体感」とは、異民族に侵入されたときに負った苦痛の経験により形成されたものである<sup>28</sup>。言うなれば、ダンカンが壬辰倭乱についての歴史的記憶が民間伝承を通して維持され、これが開港直後朝鮮の人々の排他的一体感を形成するのに影響を与えたと見ているのである。

開港期に朝鮮を旅行した日本人たちも、壬辰倭乱当時多くの朝鮮人が日本軍の被害を受け、開港当時の朝鮮人も多くは壬辰倭乱時代に死んだ人の子孫であるために、朝鮮人の中には壬辰倭乱の惨状についての記憶が伝承され、それが日本への深い恨みにつながったと判断したとある<sup>29</sup>。

それでは、日本に対する朝鮮の民衆の認識は否定的なものばかりだったのだろうか。そうではない。まず壬辰倭乱の時だけ見ても、民衆が無条件に日本を嫌っていたのではなかった。無能で腐敗した朝鮮政府が倒れると、ソウルの奴婢たちは日本兵を歓迎し、日本兵と力を合わせて地方官を殺害し、勤王兵を募集しようとやって来た臨海君と順和君を拉致するなどした。また郷兵たちは、官軍の命令とは関係なく独自に行動し、戦争が終わった後にもゲリラ(土匪)になった<sup>30</sup>。こうした行動は、朝鮮政府への敵対感が日本軍への親密感として表わされたものだと考えられる。

壬辰倭乱以降、朝鮮民衆の日本についての認識は、外交関係が復元され、朝鮮通信使が往来するなかで、敵対感が完全になくなったわけではなかったが、少しずつ薄まっていった。そして、一方では民衆を動員して、朝鮮王朝を打倒しようとする一部抵抗知識人の中には、日本と結んで事を起こそうと画策する者が少なくなく、このことも日本に対する朝鮮人の認識が必ずしも否定的なものばかりではなかったということを示している<sup>31</sup>。

例えば、1813年晋州で星州出身の郷班・白東源が日本に兵を請い、対馬と結んで済州島を攻撃し、占領しようとする反乱を企てた。1817年には全州で蔡壽永らが済州島へ入り、対馬に請兵してクーデターを起こそうとした事件があった。また1836年には東萊でソウル出身班族の南膺中という者が日本に援軍を要請し、反乱を企てたが逮捕された<sup>32</sup>。このように19世紀に発生した暴動とクーデター計画では、日本への強い反感は見られず、むしろ一部ではその時の朝鮮政府を打倒するために日本との連帯を模索し、それを望む姿が多く見られる。特に済州島を占領して対馬と結ぶという発想は、1898年房星七が主導した済州島反乱でも同じ様子を見せているところがある<sup>33</sup>。

<sup>27</sup> ジョン・ダンカン(2007)158頁

<sup>28</sup> ジョン・ダンカン(2007)155頁

<sup>29</sup> 裴元燮(2001)「開港期の対清意識とその変化:民衆階級の動向を中心として」『韓国思想史学』第16集、219頁(배항섭(2001)「개항기의 대청의식과 그 변화: 민중계의 동향을 중심으로」『한국사상사학』제16집, 219쪽)

<sup>30</sup> 金康植(1993)「壬辰倭乱義兵活動と性格」『釜山史学』17集、釜山大学校史学会(김강식(1993)「임진왜란의 병활동과 성격」『부대사학』17집, 부산대학교 사학회)

<sup>31</sup> 裴元燮(1994)「開港期(1876~1894)民衆の日本に対する認識と対応」『歴史批評』第27号、220頁(배항섭(1994)「개항기(1876~1894) 민중들의 일본에 대한 인식과 대응」『역사비평』제27호, 220쪽)

<sup>32</sup> 李離和(1984)「19世紀前期の民乱研究」『韓国学報』35、71-76頁(이이화(1984)「19세기 전기의 민란 연구」『한국학보』35, 71-76쪽)

<sup>33</sup> 当時房星七は民乱を成功させると、中央政府に投降するよりは、戸籍を日本政府に委ねることで済州島の自治を保障してほしいという考えを示している。趙誠倫(1986)「1988年済州島民乱の構造と性格」『韓国伝統社会の構造と変動—韓国社会史研究会論文集』第4集、文学と知性社、209-236頁(조성윤(1986)「1898년 제

このような点を考慮すると、朝鮮時代を通して民衆の感情の中には、実は日本への敵対的感情だけではなく、日本の軍隊、あるいは日本人への親近感、連帯しようとする気持ちが同時に存在していたと考えられる。問題はこのような日本についての多様な形の認識、感情が時代の変化につれて、どのような方向へ拡大していくかという点である。特に1876年の日本による強制開港とそれ以降の日本公使館設置、日本教官による別技軍訓練などを見守ったソウル地域の民衆の間では、反日的な感情が急速に拡大し、それが壬午軍乱の際に爆発したと考えられる。

ダンカンが述べたように、近代国家を構想し、韓国社会を改革しようとしていた開化派をはじめとする当時の支配層、思想家は、西欧列強や日本と似た近代国家を建設するには同意し、熱心だった。しかし、彼らの多くは民衆の生活には特に関心がなく、民衆とかけ離れた自分たちだけの、自分たちのための国家改革を構想していたのである。

そしてそのような開化派が最も羨望し、熱烈に追うことを望んだモデルが、いわゆる「文明国家・日本帝国」だった。民衆の目には、民衆のための改革に関心がなく、蓄財に没頭する保守政治勢力も嘆かわしいが、同時に日本をモデルとする開化政策を信奉し、改革思想を推進する開化派も民衆を遠ざける点では同じだったのである。もし開港以降、日本が朝鮮に浸透していく過程で、朝鮮民衆から支持され、心をつかんだならば、民衆は日本にはるかに宥和的・親和的な態度を示していただろうと考える。当時のソウル地域の民衆にあれば反日意識が強く表出していたのは、それだけ日本勢力を受け入れて手を握ろうとした閔氏戚族勢力と開化派が、民衆とはかけ離れた政治構想を持って政策を推進していたためだった。

一方で開港以降、朝鮮民衆の西欧人への対応はそれほど敵対的ではなく、さらには西欧人の視点から見ると、「歓迎」と感じる程友好的だった。このような対応は、日本人に会うと敵愾心を示し、殺そうとしていたのとは対照的だった。このように西欧人への対応が日本への立場とまったく違っていた理由は何だろうか。それは、西欧勢力が朝鮮に進出する際に、医療と奉仕活動、産業・技術の普及といった方法を動員して接近していったことで、侵略者としての危険性を低めたためと考えられる。

開港初期の朝鮮社会で、ソウルの民衆が持っていた意識は、あくまでも百姓意識であり、平民意識であり、自らを一つの民族としてまとめて考えることはそれほど強くはなかったと考える。民衆が自分たちを一つにまとめて考える同胞意識が発展したのはそれ以降だった。朝鮮民衆の感情の中には、日本への敵対的な感情だけではなく、日本の軍隊や日本人への親近感、連帯しようとする気持ちも同時に存在していたと考えられる。問題はこのような日本に対する多様な形の認識、感情が時代の変化によってどの方向へ拡大していくかという点である。1876年の日本による強制開港と、それ以降の日本公使

---

주도 민란의 구조와 성격』『한국 전통사회의 구조와 변동—한국사회사연구회 논문집』제4집, 문학  
과지성사, 209-236쪽)

<sup>34</sup> ジョン・ダンカン(2007)163頁

館設置、日本教官による別技軍訓練などを見守っていたソウル地域の民衆の間では否定的な考え、すなわち反日的な感情が急速に拡大し、それが壬午軍乱の際に爆発したと考えられる。開港の状況で閔氏戚族政権への失望と反日意識が急速に高まり、それが壬午軍乱の際に爆発し、甲申政変を主導した開化派勢力を攻撃していたソウル住民のより発達した反日意識が、逆に韓国人住民の間の同胞意識を持たせることになったと考える。

## VI. おわりに

開港以降、朝鮮王朝は急速に押し寄せて来た外国勢力に直面し、従来の中世国家体制を維持しようとする動きと、新しい形態の国家権力を樹立しようとする動きが互いに対立し、互いに絡み合いながら、混沌に陥っていた。この過程で民衆の国家権力に対する認識はもちろん、外国勢力、特に中国と日本への認識と反応も変化し続けた。本稿では開港初期のソウル地域民衆の自己認識がどの水準に到達していたか、そして彼らの外国勢力に対する認識はどのような形だったかをとらえようとした。

開港初期、特に壬午軍乱と甲申政変で表れたソウル住民の態度は、明らかに閔氏戚族政権はもちろん、開化派に敵対的だった。このように民衆が開港初期から日本の侵略に極めて否定的な反応を示したのは、昔の倭寇の相次ぐ侵略と壬申倭乱による莫大な被害を負っていた朝鮮民衆の集団トラウマのためだった。この集団の記憶がそれ以降の世代にも続けて伝わっていきながら、住民に継承・伝達されていったのである。民衆は体制を攻撃するとき、そして開化派を攻撃するとき、常に日本との関連を媒介にしていた。支配層が日本とどのようなつながりを持つようとし、どのような態度を取っていたかによって、彼らが民衆の立場に立って社会改革をしようとする勢力かを判断したということである。当時民衆の体制改革に関する案は特に具体化しておらず、漠然としていたが、民衆の政治構想は大元君をはじめとする体制内の革新勢力への期待として表れていた。

このような状況を克服して民衆の意識を一段階高めたのが、まさに東学思想であり、彼らが中心となった1894年の農民戦争だった。従って、開港初期のソウル地域で形成され始めた近代的国民意識は、農民戦争段階になると、全国的に新しい次元へと移っていったと見ることができるだろう。

## 批評文(原田 環)

---

1. 本論文は1876年の開港直後から1884年の甲申政変までの期間において、反日意識を軸に「臣民」と「百姓」の中から「民衆」が形成され、「国民」として自覚していったかを明らかにしようとしたものであるという(I. はじめに)。しかしながら、「民衆」については定義が為されているが、「臣民」「百姓」「国民」については定義がないので、「国民」としての自覚化(国民の形成)を明確にできていない。
2. 19世紀後半の朝鮮の対外問題を、日本との関係を「反日」(たとえば壬午軍乱、甲申政変)的側面にのみに求めている。「学日」(日本を近代化のモデルにすること。たとえば紳士遊覧団)的側面は捨象している。当時の朝鮮にとって日本は「反日」の対象であるとともに、「学日」の対象でもあった。「反日」と「学日」を同一視野のもとに総合的にとらえる必要がある。
3. 清との関係が過小評価されている。開国期の朝鮮において、清の果たした役割は大きい。たとえば、『朝鮮策略』、朝米修交通商条約、朝清水陸貿易章程、壬午軍乱、大院君の保定幽閉、甲申政変など。しかし本論文では壬午軍乱、甲申政変を対日問題の文脈においてのみ取り上げている。壬午軍乱、甲申政変は日清両国に関わる事件であるので、東アジア全体の枠組みの中で取り上げる必要がある。
4. 開化派(本論文の開化派についての概念規定は疑問であるが、ここでは立ち入らない)に対して否定的であるが、筆者の言う「近代民族国家形成の論理」(IV. 甲申政変とその後の変化)を持っていたのは、周知のごとく金玉均や兪吉濬などの開化派であった。開化派を排除しては、開港期の朝鮮における「近代民族国家形成の論理」の構築を明らかにできないのではないだろうか。
5. 民衆が「外国勢力の浸透への抵抗の論理」と「近代民族国家形成の論理」を「具体的な闘争過程」で結合する方向で、「近代民族国家樹立による民族問題の解決を目指す方向へと動いていった」(IV. 甲申政変とその後の変化)としているが、実証できていない。

## 批評文へのコメント(趙誠倫)

---

まず筆者の論文に関心を持って批評して下さった原田環教授に感謝申し上げます。原田先生はこの分野に精通した日本の韓国史研究者なので、筆者の論文を発展させるのに大変役立った。以下で原田先生が指摘した五つの点について簡単にお答えする。

1. 原田先生が指摘したように、筆者は本稿で「臣民」「百姓」「国民」について正確な定義をしていなかった。そのことは敢えて説明しなくても常識的に理解できることという考えのためであった。簡略に整理すれば、近代国家形成とは政治的な側面から見ると、中世の王政(Monarchy)から共和政(Republic)への転換を指す。そして「臣民」とは王の支配を受ける人々を指し、「百姓」とは西洋ではなく朝鮮社会で王と官吏を除く一般住民を指す。「国民」は近代国家の構成員を指し、民衆は被支配勢力の中で近代国家を目指しながら積極的に動く集团的主体を指す。
2. 原田先生の指摘通り、当時朝鮮では「反日」と「学日」の傾向が同時に存在した。その点を念頭におかなければならないという点は理解するが、本稿の展開上「学日」の傾向への分析まで包括するのは無理だと考えた。そして原田先生が使用する「学日」という概念を使って説明すると、「学日」は両班支配勢力から現れた傾向で、このことが主に開化派を中心に形成されたが、筆者が扱う民衆勢力ではほぼ見られなかったことを指摘したい。
3. 清との関係も重要な部分である。しかし反清意識についてはすでに他の研究者が扱い(金正起)、本論文の議論対象が反日意識に限定されているので除外したものである。
4. 原田先生が指摘した開化派を中心とした支配勢力の近代への変革論理は、すでに多くの学者によって研究された。繰り返す必要がないと考える。しかしながら、本稿で集中するのは民衆勢力の論理である。筆者が扱う主題ではないので除外したに過ぎない。
5. 短い論文を通じて筆者の考えを十分に示したのではない。いまだ不足の点が多い。筆者の論理を支える史料を補強する作業のため、今後も努力していきたい。

以上、簡略に批評に対し筆者の考えを整理した。批評の多くの部分が妥当な指摘だと考え、機会が与えられ次第修正したい。しかし、いくつかの指摘はこの論文で消化できる範囲を超えるものだと考えられるので、今後他の論文を通じて別途に討論しなければならないと思う。関心を持って批評文をくださった原田先生に重ねて感謝申し上げます。